

編 集 後 記

徳島赤十字病院 産婦人科 別 宮 史 朗

数年前から産婦人科医不足が社会現象になりだした。医師の不足という問題だけでなく、分娩をやめた施設やお産をしない産婦人科医が増加した。現に徳島県下でも2009年から2病院が分娩をやめてしまう。なぜ産婦人科医が不足し、分娩をしない施設や産科をやめる医師が増加したのだろうか。産婦人科は訴訟が多く激務であり、そのため研修医達が産婦人科を選択しなくなったと言われている。また、現場の産婦人科医もお産のリスクを避けるために分娩をしなくなったようだ。これらは今後改善されていくだろうか。それともこのまま、いやこれ以上の産婦人科医の減少をきたし、まさしく「産科崩壊」に発展していくのだろうか。

ある産婦人科医が自分の進路を決定したきっかけは、彼が大学5年生時の分娩見学にあった。20年以上も前のことなので詳しいことは忘れたらしいが、確か不妊治療後の高齢出産例であった。元気な赤ちゃんが産まれると同時に、妊婦さんは感激のあまり泣き出した。見学していた看護学生や医学生である彼らも、もらい泣きをしたらしい。赤ちゃんの誕生ってなんて素晴らしいことだろうかと彼は感動した。もともと彼は外科系志望であった。産婦人科は外科系だし分娩にも携われる、そんな思いから彼は産婦人科医を志望した。専門とする分野を選択するときも、迷わず周産期（産科）を選んだようだ。当時の教授に、周産期を選べば学位は取りにくいとも言われたが、彼は純粋に自分のやりたいことだけを考えて周産期を専門に選んだ。多忙な病院勤務もあったようだが、産婦人科医になったことを後悔したことはないらしい。それどころか、生命の誕生に携われる自分達の職業を誇らしく思っているようにも見える。

最近、彼に尋ねてみた。「いつまでおまえはお産に携わるの?」「いつまでかなあ?訴訟がおこるまでかなあ?体力が続く限りかなあ?…」彼はこう答えた。「でも、産婦人科医にやりがいを感じているうちは、もう少しだけお産の手助けをしたいと思っている。」彼はこう付け加えた。エコーでお腹のなかにいる赤ちゃんを観察したり、元気な赤ちゃんの泣き声を聞きたいと、まだ彼は思っている。

院内雑誌が発行される季節になった。「徳島赤十字病院医学雑誌」という一病院の雑誌でありながら、その充実した内容にはいつも驚かされ、当院の医療レベルの高さを感じる事がしばしばである。

また、研修医の先生や若い先生方は、経験した症例を自分のものにすると同時に知識の整理をするためにも、面倒がらずにどんどん論文の作成をしていくことが大切であると思う。自分でまとめたものはずっと自分の知識となり続ける。

これからもこの雑誌が、ますます充実したものになり、レベルアップしていくことを希望しながら編集後記とさせていただきます。